

桜の日

ヒロシ

ぐっすりと二度寝をして時計を見ると11時を回っていた。昨夜布団に入ったのが23時だったから12時間も寝たことになる。上半身を起こし背伸びをする腕と背中の骨がボキボキとなった。頭が少し痛むのは昨晚飲み過ぎた酒のせいだろう。

夫と別れて3ヶ月。最初は虚しかったこのマンションにもそろそろ慣れた。

私達には子供がいなかったので離婚手続きは案外スムーズに進んだ。

夫である拓也の浮気に気づいたのは昨年末のこと。夕食後に事実を確認すると意外にもあっさり認め「なにか悪いのか？」という顔をしたので逆に私が戸惑ってしまった。拓也は元々離婚しようと思っていたらしく、それから家を出て行くまでは然程日数はかからなかった。

私はあの男のどこに惹かれたのだろう。ルックスは普通だしお洒落なわけでもない。時間にルーズで付き合っていた頃のデートの待ち合わせには毎回遅れて来た。30分以上遅れてきても「おまたせ〜」という脳天気な一言で片付ける。私もその脳天気な声を聞くと「ま、いいか」と思っていた。

お金の管理もずさんだった。デートのない休みの日はパチンコか競馬。今思えばデートの待ち合わせに遅れる理由の一つにパチンコがあったのではないだろうか。そして欲しいものがあれば先のことを考えずに買っていた。もちろん私へのプレゼントも多くあったが、給料日前にピーピー言っている姿を見せられると素直に喜べなかった。

浪費癖は結婚後も続き、拓也の給料が生活費に回されたことは結婚生活3年間一度も無かった。つまり3年間は私の給料で家計をやりくりしていたのだ。

「結婚しようか」

付き合って2年目の春、デートの帰り道で言われた。私も拓也も31歳になる年だった。同級生が次々と結婚していく中、多少の焦りもあったのかもしれないし、今婚期を逃したらもう二度と訪れないような気がして、私はつい承諾した。

一緒に暮らし始めてすぐ、拓也という存在が悩みの種になった。

掃除、洗濯、料理には全く手を出さない。「手伝おうか？」という気配すら見せない。それでも私は「家事は妻の役目」として受け入れてた。しかし給料を全く入れないのには口出しした。一緒に生活しているのだからお互いの給料で家計をやりくりしていくべきだと私は思っていたからだ。しかし拓也は頑なに拒否した。小遣い制にするわけじゃなく、月々少しでも家計に入れて欲しいと頼んだ。その結果、結婚生活1ヶ月にして早くも「そんな事なら出て行く」と言ったのだ。

30歳にしてようやく娘が結婚したことに喜んでいた両親の手前、1ヶ月で離婚などするわけにはいかなかった。

それからは私の、決して多いとは言えない給料で家計をやりくりした。あいかわらず拓也は週末はどこかへ出掛け、夜遅くに千鳥足で帰ってきた。手に縫いぐるみやアクセサリーを持っており「ほら、プレゼントだ」と渡されることもあった。おそらくパチンコの景品だろう。その時は「あら、ありがとう！」と受け取りリビングに飾ったりするのだが、給料日前になって遊ぶお金がなくなり家で暇そうにゴロゴロしている拓也の姿をみるとそれらのプレゼントも悲しく映った。

それでも、こんな私を妻にしてくれた拓也の存在に感謝し3年間生活をした。

そして昨年末である。

いつものように拓也はふらりと何処かへ出かけた。私はその日、仕事仲間に「映画を見に行かない？」と誘われており、昼前に家を出た。駅前で友人と落ち合うと「映画の前にランチを食べよう」ということになり映画館の近くにあるイタリアンレストランに入った。

そこで、拓也を見つけた。最初は他人の空似だと思ったのだが、どう見ても拓也だった。久しく見ていない笑顔の先には20代半ばと見える女性の姿があった。ランチタイムということもあり店内は混雑していた。

「少し待たないとダメね」

ちょっと困った顔をした友人に

「じゃあ違う所にしない？なんか中華とか食べたい気分だし」

と向かえ側にある中華料理店を指さすと友人は指でOKの形をつくった。

「中華かぁ。じゃあ私は回鍋肉食べたいな。涼子は？」

友人に聞かれたが頭が回らなくて

「私も回鍋肉かな」

と答えた。

その日の柳色も映画の内容も一切頭に入らなかった。拓也とあの女性の姿が頭をグルグル回っていた。映画が終わると「ショッピングしたい」という友人に「急用が出来てしまった」と適当な嘘を付けてさっさと家に帰った。

「まさかな...」と思いつつも「やっぱりな...」とも思った。

もやもやした気持ちを抱えながら夕飯を作って独りで食べていると拓也が「ただいま」と帰ってきた。

「おかえり。夕飯は？」

「ん、食べてきた」

「そう」

拓也はソファにドッカーリと座りテレビをつけた。お笑い芸人が大爆笑している。私は少し深呼吸をした。

「今日、職場の人と映画を見に行ったんだけど、その前にランチしようってことになってイタリアンレストランに行ったのよ」

私は店の名前を口にした。その瞬間、拓也の表情が少し変わったのを見逃さなかった。

「あの女、どういう関係なの？」

天気が良いので二日酔いの頭を覚ましに外に出た。マンションの向にある公園の片隅にある一本の桜が開花していた。

「そういえばここに桜の木があったんだな」

青空に浮かぶピンクがとても美しく、素直に「綺麗だな」と感じた。

溜息の毎日だった。遊びまわる拓也と家計のことで一杯だった。季節を楽しむ余裕なんて無かった。目の前にある桜の存在さえ忘れていた。

私は桜の木に触れた。ゴツゴツとした幹の感触がとても懐かしく、故郷の学校に咲いていた桜を思い出した。

携帯電話を取り出し、アドレス帳から実家呼び出す。2回のコール音の後、電話に出たのは父だった。

「もしもし？私だけ。そっちの桜は咲いてる？」

「ん、涼子か。桜？もう少しで満開ってとこだな。どうしたんだ？」

「ううん。今度お花見しに行こうかと思ってね」

来週末、予定を開けておくようお願いし、携帯電話をポケットにしまった。

大きく背伸びをして桜を見上げた。

4月に桜が咲く限り、私は人生を楽しめる。